

## アユ稚魚の飼育試験(Ⅱ)

石井重男・船坂義郎・小木曾卓郎

## 1 試験の目的

アユ種苗の大量生産を目標とし、本実験では中期餌料であるミジンコ類にかわる人工餌料の開発を目的とした。

## 2 試験の方法

供試魚は、アユ稚魚の飼育試験(1)で飼育した全長2cmの仔魚を用いた。

飼育池は正方形で面積4m<sup>2</sup>、水深70cmの池3面を使用し、試験区をA区、B区、C区の3区設定した。

放養尾数はA区に150尾、B区に150尾、C区に200尾を収容し、1月5日より試験を開始した。

餌料は捕食されやすく、栄養その他特に消化されやすいこと等を考慮し、次の餌料を用いた。

## (1) A区の餌料

餌料の種類	エッグボーダーSS
製法	鶏卵(全卵)を真空噴霧乾燥したもの
成分	たん白質 63.5±2%
	脂 肪 34.0±2%
	灰 分 4.5%以下
	水 分 5.0%以下
	可溶性無窒素物 20.0%以下

## (2) B区の餌料

餌料の種類	エグレートパウダー
製法	鶏卵(全卵)をたん白こう素で分解し真空乾燥したもの
成分	たん白質 32.4~33.4%
	脂 肪 22.0~29.0%

灰分	2,8~4,2%
水分	3,0%
炭水化物	26,0~33,5%

(3) C区の餌料

餌料の種類 冷凍ミジンコ

製法 9月上旬より-25°Cの冷蔵庫で冷凍保存したもの。

給餌方法は、エックボードー及びエグレートボードーは水にとかし、少量ずつ滴下した。また冷凍ミジンコは凍結したものを水面に浮かして与えた。

用水はボイラーで加温し、循環使用した。

3 試験の結果

摂餌状況はA区、B区は給餌後2日目に、C区は1日目に餌料滴下部に集まって摂餌し、5日目より各区ともほとんどの仔魚が滴下部に集団となり、なかには水面まで浮上し、きわめて活発に摂餌した。

生長度は試験開始後10日目ではB区とC区にはほとんど差はなかつたが、A区はやゝおくれた。20日目でもA区はB、C区より生長がおくれた。

生残は15日目までは全く斃死は認められなかつたが、16日目より遊浮不活発な仔魚が出現した。20日目には多数出現し、斃死もみられた。検鏡によりキロドンの多数寄生を認めた。23日目に至り多数の斃死をみたので止むなく試験を打切つた。しかし各区ともほとんど同じへい死率であり、餌料差とは考えられなかつた。

25日目までの生残尾数はA区5尾3,3%、B区8尾5,3%、C区16尾8,0%であつた。

本試験によりキロドンの発生せる15日目頃まではエグレートボードー及び冷凍ミジンコで順調に飼育できたことから、これら餌料がアユ仔魚の中期餌料として、一応使用できるものと考えられる。

4 今後の問題点

寄生虫の発生原因は昭和39年度の実験例ならびに本実験例より、残餌による飼育用水の汚濁と考えられる。したがつて循環水を使用する場合は用水の殺菌ならびに人工餌料の調餌、給餌については用水を汚染しないよう考えなければならない。

本実験により、中期後半餌料の目安はある程度ついたと思われるが、さらに中期前半から後期

にわたり、長期飼育を試みる必要がある。

ア

1

た

た

て

さ

2

を

以

駁

の

言

人

を